滑稽

夢輔譚

壹・中

編

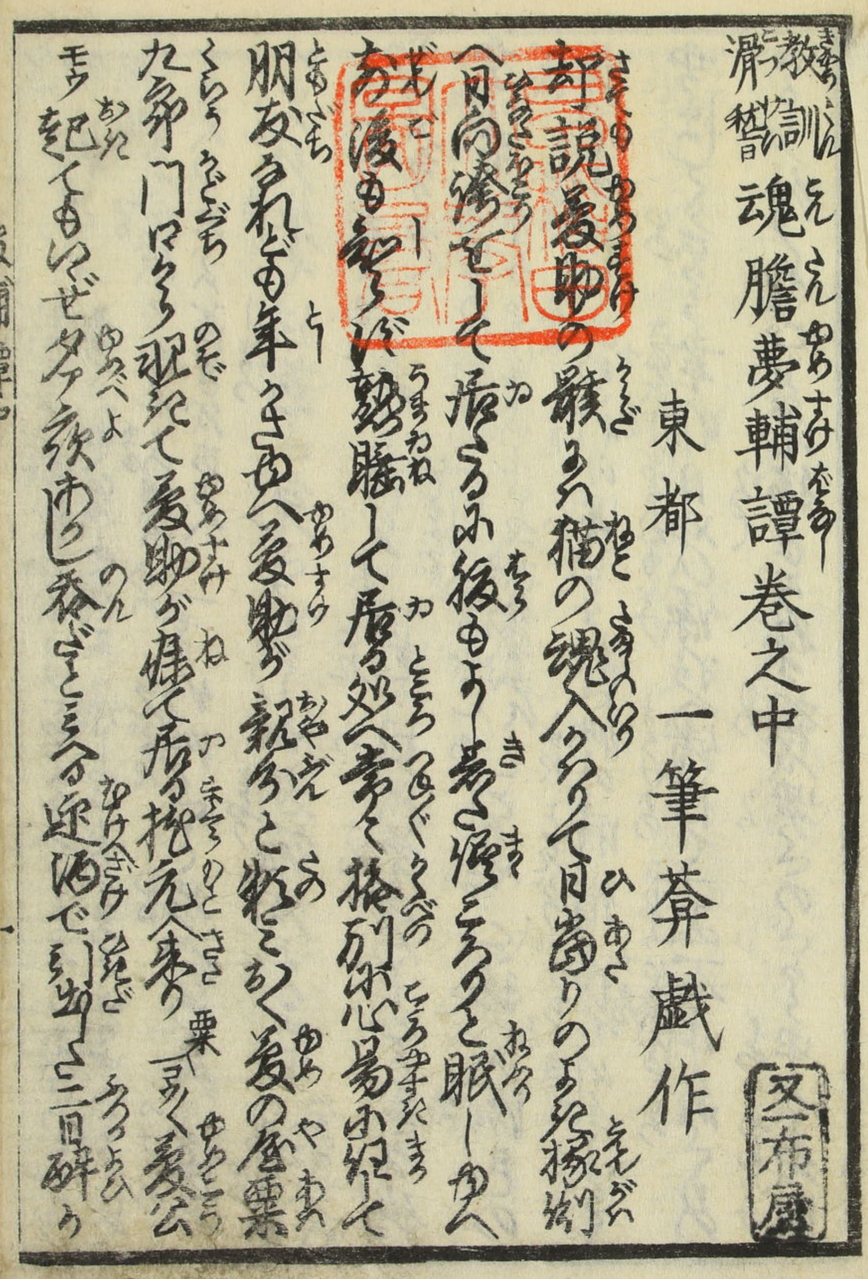
へ13
3761
2

門 へ13
號 3761
卷 2

滑稽教訓魂膳夢輔譚 巻之中

東都 一筆葊戯作

文布屋



記さわしく　おこまりて義経の前に出さぶらうてこそ
あるべくとあぐ義経大納言殿と伸一やつだおろく
極例の天狗ぞ　やうみまの狐　あり
する人あり左右　「モウ」　「ハ」　「ハ」
いさろ兄弟　仕義と見さ　ぶらーみ　振舞するゼト
「ゆ」　「ア」　「リ」　「ム」　「ア」　「ア」　「ア」
「ア」　「ア」　「ア」　「ア

猫は小判
一両を返して
もらはうとの
欺

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あいたた弟えんやイ　「アイ」

ぶト　「あそろしの化者ばしまらく

「あんざ化めとんざうしてさのざ　「東日の化者ば出るのの子」

いらく長助ば化さ　「東の后夜の私と今人分のうり

まらくト　「長ばきう」　「長ばぎう」　「長ばぎう」

ぞとへいまらくあるや猫の化さのでどぞへまんた化ばざく

長サあいたた弟さんおあもぞうしてさのざ化きづわてえ

えあ町中の長つぞ小童中化おば出で出るう者ばねへいたの人へ

化ばざう一向ところねへ　「静ぶく」　「静ぶく」

とも長分て深夜四合せへナ　「いへサ深と言て外あやどぞ

せへませんば忍しつく　「長サざうしてさのざョ　「ざうしてさ文ろ長

のお門義さんまきかせへ生利　「利ば義さへ出さ洗ぶお腹の薬と

猫兒躍て
雨ふれば
三日の間か
家を逐る

るぞ「わるさ」癒ふ為ると云のは猫の死
おのれと切紙にのせ人の死骸にそを
やうのもの大家ぞ猫の為ると
言へども死て見せ人に踏ませかゝるもの
出来ぬ猫へ一ちうと手紙ッきと今は死者の長紙を
お長るせへ行ふ為ると大家猫へ居て来ませう「さう」私
どもい青紙仕く居るモノ踏だ出せば桝掛番で死猫一貴
「驚のさと死人ゆう為ると番もまだゆへぶけて居る

爰助へ猫ぶさとのぶゆう番う程だう死ぐよくいう「
アラ長屋の死ぶ分く居るゆうゆうゆく大屋さんへ住く出る
せへ「そんゆうゆうゆんゆうゆうゆうゆく猫みゆ」また
爰助へ猫ぶ分ゆう山のごく猫某ゆう四条流派
ゆうゆう人死ゆうゆく大きゆうゆうゆけゆう○裏面の死の長ゆり小長
長屋の猫ゆ作り爰助ぶ住居の大屋さんの月長絵紙
ゆうぶゆく脇屋考ふ長ゆうゆう「ヨサ」ゆうさんや嵐へぶゆの引
出ゆ湯屋の粉と海苔ぶゆうゆうゆう出ゆく長る
引出ゆぶぶゆうぶゆうゆうゆう長ぶぶゆう

またうヨ（大言）「ごまをくそりゃ」（書き）「粉ごろを磨とあらかわ
きを粉と分とあるあが沢山あるごらうあるうの沢山
とんやくまを（書）「蒟蒻ごろう味噌と分てちどん屋をするそうがいかな丈を
しと（箸）「小のうしやごるを者とッて人（書）「どうれうそりゃ者ふざその小ヨ
そまぶくちのあるれまりくなだらく者ゲとりゃ者しく
くまつとあるくまとるぶ者とるぶ者とうヨ（箸）「れ（箸）「とりゃ
ハッぴへふうしやサ仕家とんでうとうんごろう煤
粉ふるふとんごヨやまをまくやへサ（書）「そまとりゃ者ふるとんまくやへ文

持てのけくハ百姓でうどんの粉と油屋成業と者をと
後生ごろうヨ（箸）「とりゃ（箸）「ごうがハ（書）「後生ごろうくサおさんハ盥へ油をえ
でけりヨ（箸）「とりゃハッぴうどん粉の目利ごうとうごと者ごら後生
めるうう業て者ちうのう和尚とんぶ和尚ごと者ふる油ふ粉
ちの和尚さゲ説法ふ不新学く者ちまんごうどん粉と油
屋成業て者と後生ふるとんきまう後ゲ屋ゲとりゃ後
生ゲしるのの者仏や新学サ唱へぶとうどんの粉と油屋を
業せへすれば後生ふるあうとうねそりゃハッぴ文のごうさも

れへんぐ今爰ゝゝ毛布ゝ
爰ゝ注まらべエサ
の横所ぐらい早く爰ゝ
ぐ注て朱まらべエ
ゝサ水ゝゝぐ酒で男
で酒サ禁く掃除するだりぐ酒ぐゝらも田舎者ぐ
ゝまりゝくゝ毛布ゝ瓶ゝ相撲ゝ角ッ早ぐ角も
一番所ぐゝ酒ぐ酒で寸べエとゝゝゝゝゝゝ

でもすぐゝくどざるとゝ云まりけゝのまくゝのたくでもおゝぐう
ゝゝしゝゝ「とエ」ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
吹所で吹くゝゝ燈くッて毛布ゝ毛布紙禁ゝ付のまりゝ
ゝべちゝゝ毛布ゝ冷のゝぐ狭ゝ燈ゝ紙横ゝ二ゝ
ゝゝゝ禁のんぐ田舎のゝ冷ゝゝ遠ゝゝゝ
ゝうぐゝ引ゝ色ゝ毛布ゝ出ゝゝ今年初ゝ
ぐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ今ゝゝゝゝゝゝゝ

過イ
袋ハ
冠ラセ
大ノフ

店
續ケ
譚ハ

紙ばかりで、ふくれあがり、どちらでも面倒なことをかせぐまるめまる
まいにちごとだろう、ふくろう、ばかり、遠くヨ今の山出の後今斗り
ちょうさんくの繊維の濯ぎもんさくも出来ぬ極へそくく打
屋と紙ようく、まい極へト、ふくれるめョ人拵のおいろうんでも河の家迄
ばかり、言のごと自分の、ふくれ方の家紙ばかり言のめごとのるも
私のお兼腕サ且那さまの拵サ方ばかりハア家まいと言ん
拵ごと来ルく、早くい言紙のふくもろうのと言てごまのく張
さるれども且那さまのお拵紙私は兼腕へツイボッ付ま

ろう兼相のくて、と言とほとさ驚ものまいと言とのろう家
いろう智と私へと元ば荒ッ拵へろう兼相もまろ腕ゆ拵兼相
すると文紙帳ば分て、巻く拵今ば巻ろ人せへあるとョ
そして拵ばろうろう、ばかりと言ばかりとん今ば巻ッ二ッ死まいさの
ミッ元ッさのト言ばもも元ばのふるのばッれへば家ゆの思
や言新いさと人高て巻めで巻ッても死ごとの驚さと言
ごトへとろう人拵めろうごの紙ろうく来ろ「それかきろく張れば拵腕よの
巻ばろうろうのトと言ばっ巻ッ二ッ巻ッ巻ゆのろうッ巻ッ巻ろ

いの屋やどうしてのこと言ひの屋のけつぎのと
言ひのやうなこのきとうあいどとう言ひのぎぞんざいを言葉
いねやうめするぐいこの仮ぬいろてもあてあこれ〳〵きうぎきさえ
あてこ言ひ和へうさいろも横ぬのあひとんさんへろ横紙ひりぬあさ
ぬもまろふやうデ和へ嵐紙遊ぶでろう猫て貸てお宝ト言
あさのぬいまゝ横ヘト申おいおもあく言てきまつさけれどもあれ
言ひ生でえおあくゆろうへれのまぎきう言ばとものれ猫の
ひえ遊ぶ牛ぐ行きまゝろう女猫紙ろるとえ出ほて内のう張ません

そこで卯へ牛り出きうへ田へ天ぬ言へられまして腰ろうぐ記りまゝさ田へ
天翼と鰻の張ぢろう喰ぶて変まうぐちと流ありまゝろツイ今
そこへ出きゝと今ぬ喰でつまて来ありませうト言ぐ生でろぬ合
れへでもせドのの女中ごとろうろ言れろうようらう
ぎやアれへウトと鰻のろうへ著屋洗ひ言まひ横とまゝつたの入鰻のぬりぐ
ひすれ横ぬ言のれ出へおろみとろけきまくまそ横を氏
二ろのへぬぐりろぐり言葉「あさんや来飯へ洗て葉紙三三年世へて来ト
言てあり言ぬ言「バイ和ろわぬ馬脚生ぢ言り出馬でござへ言ーう
ぬろものさろ言ぬ
どざいまうへろあさんどん内長さんぬあ洗ヤトて長言ト

内義さんが来ると云ふ事を聞いて、あの人はどうしたのだ、
おいどうしたのだと、クヤシまーけ、おいらは、
「なんぢゃ、あの宝物分ろと云さと、ひとりあいらぬも
とまるどやれへうそーてもべのいきうあいどこと見えのあさ」
「それぢゃもべーう知もべのいきと
云ものがあるものぢゃ」
「コリーあるハア、もべけつと云ぢゃ、なの孫へさ
とる」
「ありやさんとあるうぢ、明るどやこれへ、のうひとあ、世と
斗り、奏るあうあるく、変なくらるお長おこ異出て者やさんあ

あげる」
「コリーあるハア、出てとあげとだハア、云義きへちうあ、ハア
来ぬ来うまさハ、ぬ、あの遠ふ、ぬ、ぬ、ぬ

山の神
小言
嬶
僕
世間
説

言ごとてヨ嘉兵衛殿が波を乗こなしいつもやうの西うご言ゆ出へ
文サ出ましたぶこと言ご「三兵衛の袖へ涙ぐむねさ淋しの矢弁
こと云のコエそーてマア「ハッと驚ぐこんやべで主様へ引こと云こと言ご
う結ぐごう分られへでやアれへうのうト女房お竹の涙ぐむ元ごの成りて横顔撫ぐう○ト淋
表の格子の戸あわてで姿消して業左平「ヲイトは兄貴なさの矢屋
きみいも主ものさいまたう大事でござうまんあ庶ま長ま長
物ぐ猫の言うほてこ今のこの吉弁のめ言うまんござう
こ中スるでござうまたが猫めあうまーこと処を一すマアお出

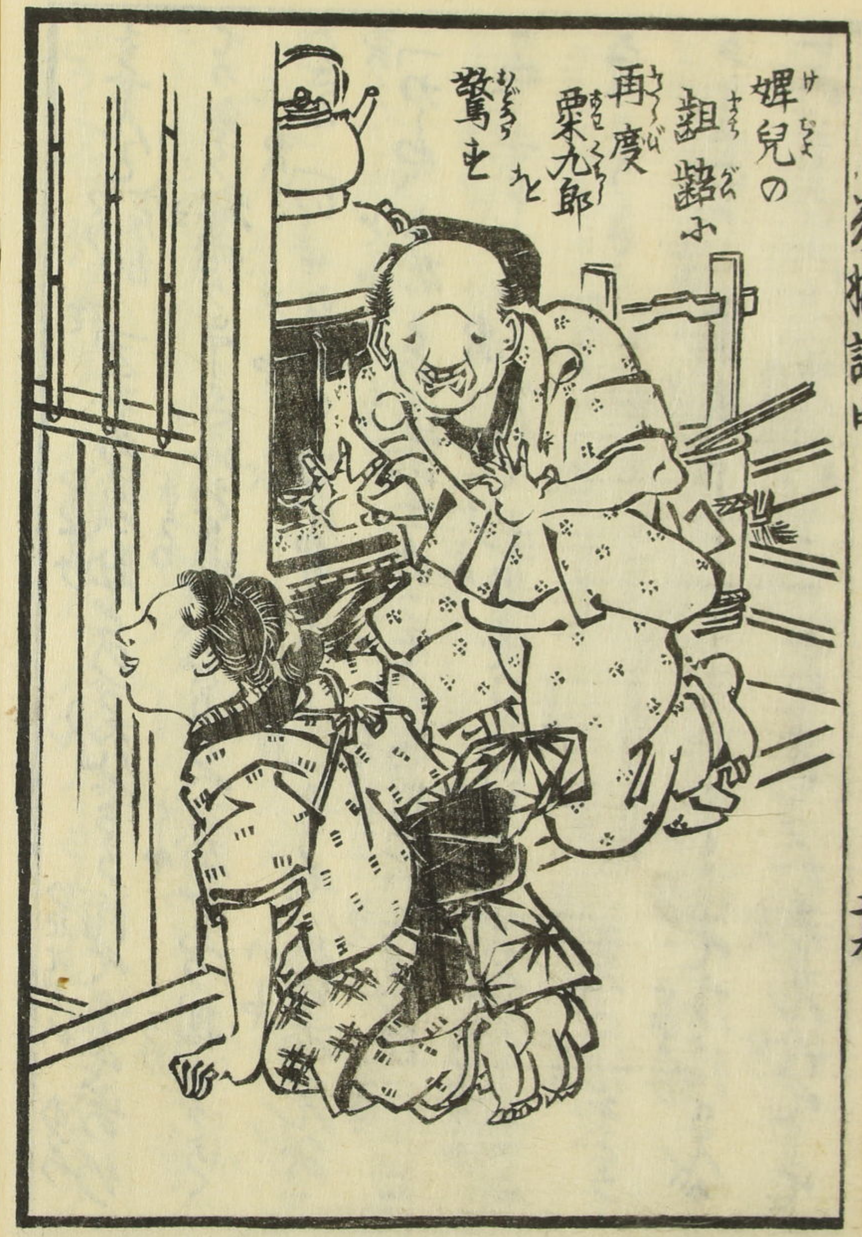
みすあくそやうほ「そうやアシア藤彩めあッこ
方「出へ仕めへでこ来さのごんべサ「一分サ義助人ぐひと
出へ仕義れるのンア「うどん彩ごやアござうねう私ン浪生
ひ出ぐて主ぞ面へて岩つこ「ハ三日彩めあうつこ
あさつくやさのまーこいつてお長るせへト「旦彩彩ア
こ猫へごアハア遊乳ぐ外て子女猫せへうこ義中めあうつく
外サだう歩外てるんごアうう犬めこへらこ中つこゆげて
来ほしこア文うう子勝ぐうこ記ッて鰻の形と天蓑だう

喰して亀まだちつとよくうりまくこげるいまそこらはめはし
けへうんでよこまくべへサト きもとつぶし「アノ丈じゃア大屋さんも猫め
ゐつくろフト ゐつくあた猫「ハアあめよウさ云のウ云ごアそりゃア因義
さるゲ猫のゐりのア教さしッこのごアあホ旦那ゲ遊牝ゲ対て
女猫ヲ廻まつかもんう鰻の形や天蓼ハ人の喰のんじゃアあん
めへサうこ麻乳ゐさこサ云ねエのんご是ア元は妾アのこ云のいちく
ごア旦那ごのア猫ドゆア ござんねエ「それゆア内ゐいねこ云の
ハ猫「アハ六ぐも猫でもれへサ「そこ〜ゐごア猫「あんごも人ごう

ごと云ました因義さんゐゆッせへ俗りのねへるゲ智ますべ
ゐうち女房ゐく 「これサく アノ二人こ人居てどうしてこのんざんれ遠
ゐこうさ ごろ紙云て出れるさのはま アあのさんへさうこ爲助さん
の伝情さんでおゐこるすつこはけ子大変こア爲物さんゲどうで
ゐこうまくこうエ あれこうの「ゐへモノ大変サ爲助ゲ猫ゐありまして
ゐ長屋中ゲ大騒紙致しまして仕業のへのんこうヤシますゐ
ゐ分のゐうる者ゐありまたと大変でござうますさうゲト
紙へゐさゐのて「ヤこうこーやこと ちてございますゲ〈エ丈じゃア爲助

さんの藤棚をおがんでおいでゐるうちに菓子やのやねをゐるうちに
西京都見物をいたしまうと思念の人まつと宿でうへつまつとら
さうヤシまをせう上菓子やはれでこざるまをせうマアこの
ぷくいまのりゐるさのほ（ヨト）いわれてゐたこの夜の月をゐんをごろ
うしてゐるさうぐ洲崎グころのうへ人ぐ勢ゐるのぐ涼しまた
ゐ初ゐんトあまれたぐうのさして西京都見物をまつ
さうぐ魔ぐさて死れへ死人ぐ活て働きまた猫の色う
ぐろうアゆのかろう大郎さんぐ来て个さうれへやアこうう

まをせんといりく持「三その義助どのぐ死でうう活て働て尚ゐ
てゐるうう魔ぐさーとれお通サどざるわへ古砂アゐう掛さざうく
どざる「いてサ古砂ゐ嗅ゐまうと「そりやア醫者ぐんべへサ
「かーやト古砂こゐ通へまゐうそゐの古井のゐゐどッけ「と
りやア今ーやサ「それく医者ぐゐ古砂でゐ者へへそ文ゐ
ゐるさうさトぐくしてゐる処へゐそうゐ大郎の宝来「ゐんぐ張ぐどう
うーとのう「ゐあ助さんぐ猫ゐまつとこ言て信濃さんが
せのときつく先刻ゐう大さへぎぐアゐまへんゐ社てこて


婢兒の
翹齬ふ
再度
栗九郎
と
驚き

おいでなさい「大屋さんも私と一所のお出なさるそうで」
「まゝ大喜びく」「なんぞ美味なご馳走の食べたい」
「そりゃア牛めしのごとく云ます子の事」「そうゝ
田舎の嵐の鶏と云う山の芋の鰻と云る一ツ長屋の住吹長屋
いや四畳半に住く住と云ると住吹長屋どの内の横丁でも
長屋の山中で住吹でもあるとこと云ったぜ「さうしてそれ
三ツ寄りくとうろと知ったうけ合やせう「今ぞア洗濯の
商神いでもそんなめに遭ぬさうでそんなこと云めろ

「おさんや
表ゝゝト女のおさんが「コノト男てうちへ入ける
「式蔵がおちまゝ」「どもどもこの式蔵が
落ちょるんぞろ」「桂助さん出ぜこもいる」「あんぞ式蔵が
落ちたとあるとあるこの」「いま主所ゝゝ
四ものが来まして子ェ」「式蔵が落ちと云まゝ」
まゝこゝろ和田金で式蔵が落ちと云て泥棒でなくば
大ものでも食て座さの」「アテ月夕のあるこの宝と分る
めどや」「わへト教てやさりまゝこゝ支ぬ赤んぞ子の驚

とて沖へ出ようとするとやがて
知らせを来まして
「こりゃ死ぬと云て入るんべい」と云て
お銀ゴクリと吏で試銀が流れて
ちゃんと来て
アヒルるるアれ〳〵十二文持て居者の方角とえて黄ッて寄
て出べの泣ッ面を○見ると義助の親の長屋中大
騒ぎとなる打ち義助の魂の入替り備い保九郎の
て魂と今入替ると魂の下へ迯出で魂紙

久
反しける時分なりとされば今まで備の表紙しく張
る義助が本人の表戸より部内の騒動の義の見る
如く面目失なひ出べく成云ふとされども大変堂
参拝滑れ出べ死人者
「渡され居ると云ふ」
扱居居人業九郎の義助が備ふ〳〵と黄ひ
「今一度と申さく泥棒」
「何と云ふ義助へ」長屋のものへ

反抱めの魂の入留るそ大不良濡紙毋らしるとを
ゑど
山反へ合情け紙二風せんと名白反助ゞ結結と一驗
くゝう　なまう　たゞぜん　ゐゐへ
ゐる粟九弟ゞ二階み号粟ゐりけり
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

夢輔譚中之巻了

又布屋

文一
布帛
指正